みどりの地球をみどりのままで…　グリーンコープ

共生の時代

号外

●発　行　グリーンコープ共同体理事会
●編　集　共生の時代・編集部
〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階
●電話（092）481-7923　●FAX（092）481-7876
●ホームページ：http://www.greencoop.or.jp/

口蹄疫は、「食べもの」そして「生命」の危機。この危機を、多くの人で助けあって乗り越えていきましょう！

～口蹄疫は畜産農家に深刻な影を落とし、日本の畜産業が危機的状況に～

▶免疫力のない子豚はあっという間に肺をやられるのでしょう。血性の泡を吹いて死んでいきます

◀生まれたばかりの13頭の子豚。たっぷりオッパイを飲みスヤスヤ眠る。明日か明後日には死に絶える

撮影・文は養豚家森本ひさ子さん

森本さんは、「わが家には戦争で全てを失い朝鮮から引き揚げ、川南の大地を開墾して共に養豚業を築いてくれた88歳の姑がいる。『今日は大丈夫だったけど明日はどうじゃろか』と怯える日々を姑が『召集令状を待つ思い』と呟いていた。口蹄疫は生やさしいものではない。口蹄疫の勢いを実感している者として、そのことを伝えたい。一刻も早い対策と終息を願う」と宮崎日日新聞社に心情を綴った手紙を届けた。そして、殺処分を行う獣医師に「できるだけ怖がらせないように殺してください」と頼んだという。

2010年4月9日、宮崎県都農町で口蹄疫感染の疑いがある牛が見つかりました。その後も拡大を続ける口蹄疫の被害で、日本の畜産は危機とも言える状況となっています。

「移動制限区域」「搬出制限区域」となっている地域にはグリーンコープの産直生産グループ綾豚会の生産者が含まれています。「大切に育ててきた豚を殺さなければならない」「毎日エサを食べ続けている豚が肥育適期に出荷できない」など、その経済的・精神的な負担は相当なものであると推察されます。

このような危機的な事態に、グリーンコープは私たちにできることに取り組み、精一杯の応援をしていきます。

口蹄疫ウイルスによる被害は、瞬く間に拡大してきました。5月20日までに、宮崎県内で159農場で130,258頭が殺処分の対象となり、そのうち72,776頭（牛6,761頭・豚67,013頭・山羊2頭）が殺処分されています。

日本の畜産の大きな割合を占める宮崎県には対策本部が設置され、非常事態宣言が発令されました。口蹄疫によって日本の畜産業は、かつてない深刻な事態となっています。現地では町全体に石灰が撒かれ、また道路や飲食店への入り口には消毒液が設置されるなど、至る所に感染を防ぐ手立てが講じられています。見えないウイルスへの恐怖と畜産農家へ降りかかる悲劇に、ただならぬ状況であることが伝わってきます。

このような事態に、現地宮崎県では大人も子どもも畜産関係者もそうでない人も、県民が一丸となって口蹄疫問題に立ち向かっています。グリーンコープも現地の大変さと痛みを共有し、できる精一杯の取り組みを行っていきます。

口蹄疫とは、どんな病気

ウイルスが原因で偶蹄類の家畜や野生動物（ひづめの割れた動物＝牛・豚・羊・山羊・鹿など）がかかる病気です。人への感染はありませんが、人の靴や車のタイヤなどにウイルスが付着して運ばれるなど、人によって感染が拡大する可能性が大きいと言われています。

罹患した場合は、発熱、口の中や蹄の付け根などに水ぶくれができ、それが原因で多量のよだれが出たり足を引きずるなどの症状が見られます。

感染力が非常に強く、水泡の液や排泄物に触れるだけで感染します。特に、豚は牛の100～1000倍のウイルスを保菌するため、豚が感染した場合の伝染力はとても強いと言われています。家畜伝染病予防法では、感染防止のために発生農場周囲の家畜の移動を制限し、すべての家畜の殺処分が定められています。従って肉などは一切流通することはありません。

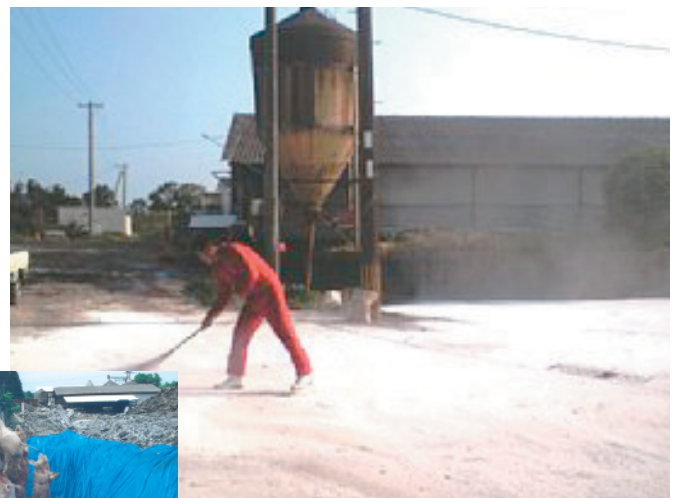
ワクチン接種に関して、宮崎県と政府間で議論がありましたが、ワクチンは感染拡大のスピードを遅らせ、殺処分の時間を稼ぐための目的で使用されます。しかし、ワクチン接種によって抗体ができることで感染の広がりがつかみにくくなることから、感染していなくてもワクチンを接種された家畜は最終殺処分されることになります。結果的にワクチンを使用しない場合より殺処分頭数が増えることにもなるのです。

どうしてここまで感染や被害が拡大したのでしょうか。その原因として、ワクチン接種そして殺処分する時期の判断を国が躊躇したことが挙げられます。この病気の本当の怖さを知っているのは、その飼育現場にいる生産者です。生産者や現地の悲鳴に耳を傾けず、経済性を優先させたことで被害を拡大させてしまった国の責任は大きく問われなければならないと考えます。

綾豚会の子豚たち

生産者にとって死活問題である口蹄疫は、私たち組合員にとっても危機的な問題！

グリーンコープは現地や産直生産者に連帯し、私たちができることに取り組みます



遠藤さんの養豚場で殺処分された子豚たち

感染拡大を防ぐため防疫作業に当たる川南町の農場関係者。情報不足へのいら立ちと心身の疲労が増す中、ウイルスとの戦いが続く（グリーンコープ産直生産者・遠藤太郎さん撮影）＝5月12日午後

まずは、応援メッセージと緊急カンパから

グリーンコープは、5月24日の共同体理事長会において、まずは急ぎ、「応援メッセージ」を届けることと、「組合員緊急カンパ」に取り組んで経済的に支援することを決定しました。また、「緊急融資」をすることも決定しました。そして、「口蹄疫による危機」の被害が甚大であることと長期化する可能性があることを認識し、今後、「社会的状況と私たちの主体的状況（何ができるのか）を見据えて、現地と情報交換や相談を綿密に行いながら、グリーンコープとして更に踏み込んで支援していくことを検討・判断していきたいと考えます。例えば、更なる経済的支援、グリーンコープの生産者や取引先への支援の呼びかけ等も検討していきます」を確認しました。

産直生産者に寄り添う

グリーンコープは、「安心」「安全」な「食べもの」を得るために、生産者との絆を大切に「継続再生産可能な産直関係」を築いてきました。綾豚会のメンバー7人のうち、このたび口蹄疫が発生した農場から半径10km圏内の「移動制限区域」に1人（遠藤さん）、半径20km圏内の「搬出制限区域」に1人（今村さん）います。例えば、遠藤さんの農場では母豚410頭が飼育され、毎月770頭の肉豚を出荷しています。4月20日に移動制限区域に指定されて以降、5月21日までの約1ヵ月間愛情をかけて飼育してきました。しかし、「みんなのために、口蹄疫の感染を広げないために、抑えるために」と断腸の思いでワクチン接種を受け入れ、飼育しているすべての豚の殺処分を決めたのです。その損失は甚大で事業も生活も立ち行かなくなってきている状況にあります。また、現在感染区域とはなっていない綾町の5人の生産者にとっても感染力の強い口蹄疫ウイルスは脅威です。その精神的なストレスは相当なものだと推測されます。

▲ 組合員から生産者へ届けられた応援メッセージ

口蹄疫緊急カンパの呼びかけ

私たちの「助けあい」で生産者のみなさんを応援しましょう!!
共同購入申込書でカンパを受け付けています。
◆期間　6／14～26（2週間）
◆申込番号 200 「口蹄疫義捐金（カンパ）」1口300円
一口でも多くのカンパをお願いします

一人でも多くの組合員の利用が何よりの支援

綾豚会 会長
押田 明 さん

綾豚会 理事
江島 鉄郎 さん

綾豚会 会員
今村 喜一 さん

搬出制限区域に指定された今村さんの農場では、すべての豚を早期出荷せねばならない。しかし、「いつから」「どのように」など行政からの連絡はなにもない。肥育豚は大きく育ち、子豚が生まれている。「一日も早く口蹄疫が終息すること、そればかりを願っています」。今村さんと息子さんはたんたんと作業をしているという。江島さんは「うちの農場の豚を殺処分するとなったら、自分ひとりで見届けます。これからを担う後継者にはむごすぎる」と。「今畜産を営んでいる人は、これまでの厳しい状況を生き抜いてきた畜産が好きな人ばかり。どれほど辛いか」押田さんは目を潤ませる。「グリーンコープの迅速な対応は本当にありがたい。その上で、組合員さんにお願いしたいことは、一人でも多くの人が私たちの豚肉を利用してくださることです」。

遠藤威宣さんの農場で殺処分がはじまった。身を切られる思いの中での３人の言葉だ。生産者のマイナスからでも養豚を続けようと思う決意や後継者の希望を支えるためにも、組合員の利用結集こそが必要だ。

〈2010.5.27　綾豚会事務所で取材〉

安心・安全な産直豚の継続的再生産に向けて

現在、2人の産直生産者のみなさんは、「継続再生産」が遮断されてしまい、畜産の「継続」が白紙になっている状況です。今後、ゼロから再生していかなければならなくなります。「ゼロから」というよりも、実際は、「マイナスからの再生」ということです。これは、「安心」「安全」な産直豚の生産を継続したくてもできなくなるかもしれない状況に追い込まれているということを意味します。「口蹄疫問題」は生産者だけではなく、グリーンコープをはじめ、みんなにとって危機だと言えるのです。

生産者のみなさんは、口蹄疫の被害に遭って苦しみながらも負けることなく闘っています。しかも、自分たちだけではなく他の同業者の仲間や地域の人のことを心配しながら、かつ、支えあい励ましあい助けあって頑張っています。

そんな生産者のみなさんが、産直豚を継続して生産できるよう、私たちグリーンコープは応援していきたいと考えます。

共に助けあうために もう一段踏み出し 挑戦しましょう

今から10年ほど前にも、宮崎県で口蹄疫が発生しました。その時もグリーンコープは生産者を応援し、共に歩んできました。今回もまた、みんなで力を合わせて助けあって乗り越えていきます。

今回、口蹄疫の感染予防・消毒に酢や木酢液が有効であることがわかりました。そこで、グリーンコープの取り引き先とも連携しながら酢と木酢を現地に送ることにします。すでにグリーンコープの酢のメーカーである大山食品から綾町生産者に届けられています。また、庄分酢から酢の無償提供の意向が寄せられています。

今後、今村さん以外の生産者にも搬出制限がかかる可能性があります。そうなる前に、出荷可能な産直豚を出荷し、企画していきます。また、通常の飼育に日齢を過ぎた産直豚も企画します。約10年前も240日齢肥育豚を綾豚会の豚として企画し、組合員に理解して利用してもらいました。

このように、私たちグリーンコープに「できることは何でもする」ことはもちろん、それを超えて「しなければならないことをいかにできるようにするのか」ということに挑戦していきます。

口蹄疫による危機は、生産者の皆さんと私たちも含めた「みんな」の危機です。みんなで助けあって乗り越えていきましょう！

グリーンコープの産直生産者の被害状況

遠藤威宣さん（川南町）

4月20日に川南町が「半径10km以内の移動制限区域」に指定されました。「移動制限区域」に指定されて以降、豚の出荷ができていませんでした。口蹄疫の「終息宣言」が出されて豚を出荷できるようになる日が来ることを信じて、飼育を続けてきました。しかし、5月21日にワクチン接種が決定されたことで、すべての母豚（410頭）と子豚・肉豚合わせて5,192頭の豚が殺処分されました。その豚の約1ヵ月の餌代は生産者にとってとても大きな負担となっています。

《遠藤さんの事業・生活の状況》
- 家族構成……夫婦2人、子ども2人（養豚業）
- 従業員数……8人
- 飼育状況……母豚410頭、月間肉豚出荷頭数770頭
- 年間事業規模……2億9000万円くらい

今村喜一さん（国富町）

5月19日に国富町が「半径20km以内の搬出制限区域」に指定されました。5月19日に最後の出荷。その後、「空白地帯」を作るために母豚・子豚も含めて、合計1,400頭のすべての豚がいなくなることになります。

《今村さんの事業・生活の状況》
- 家族構成……夫婦2人、子ども1人（養豚業）
- 従業員数……0人
- 飼育状況……母豚110頭、月間肉豚出荷頭数180頭
- 年間事業規模……7200万円くらい